

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520177
 研究課題名（和文） ヴラジーミル・ナボコフの諸作品を中心として見た20世紀文学・文化研究方法の構築

研究課題名（英文） A Preliminary Foundation of a Future Theory for Studying Twentieth-Century Literature and Culture: Through a Close Reading of Vladimir Nabokov's Works

研究代表者

鈴木 聡 (SUZUKI Akira)
 東京外国語大学・外国語学部・教授
 研究者番号：80154516

研究成果の概要：ナボコフのテキストによって例証される美学的認識は、同時代において視覚芸術（写真や映画）が感じさせた魅力や可能性と密接なつながりがある。この点に20世紀以降の想像力理論の端緒がある。また、自然科学、人文科学の主要分野のみならず、超自然的なものや神秘的なものにたいする関心という側面からいっても、20世紀の精神風土が、かなりのところ19世紀からの（断絶ではなく）連続としてとらえられ得るという可能性も検討されてよい。すなわち、いわゆるアヴァン・ギャルドやモダニズムも19世紀末に発生した象徴主義の伝統と無縁の現象ではないと考えられるのである。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
18年度	700,000	0	700,000
19年度	700,000	210,000	910,000
20年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2100,000	420,000	2520,000

研究分野：批評理論、文化理論、アングロ＝アイリッシュ文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：ナボコフ、20世紀、批評理論、文化理論、文学理論、想像力理論

1. 研究開始当初の背景

戦間期におけるヨーロッパの文化と社会の構造解明の端緒を得ることを目的とした以前の研究（「1920年代におけるイギリス文化・アイルランド文化全般の社会思想史的考察」）の成果を踏まえつつ、より広汎な視野の確立を念頭において、この時代に胚胎した問題群のその後

の展開を解き明かすことが必要となった。国民性とともに国際性という面を勘案するという観点に立ち、1920年代にイングランドで教育を受け、この時代におけるイングランド、アイルランドの知識人たちの多くと精神的風土を共有するとともに、亡命者という立場で、父祖の伝統であり遺産であるロシア文

学・ロシア文化を汎ヨーロッパ的な文脈においてとらえなおし、後年、英語文学者として国際的評価を得るにいたったヴラジミール・ナボコフを研究の焦点とすることにより、新たなパースペクティブが得られるものと想定した。

2. 研究の目的

(1) 1920年代から1970年代にかけて発表されたヴラジミール・ナボコフの主要作品を精査する作業をつうじ、20世紀全般が呈示した認識論上の諸問題を全体的に把握し、さらに今後における20世紀文化研究の発展をささえ得る理論的基盤を構築する。

(2) ヴラジミール・ナボコフの諸作品は、文学的テキストとして見て、つきることない精読の可能性を秘めた、高度に自意識的な言語藝術の粋を示すものであり、それを対象とする研究者の解釈の試みもまた、同等の精緻さと知的達成を心がけるべきことは当然といえるが、そこに、これまであまり論じられることのなかった、文化史的、文学史的に見て興味深い、いくつかの討議課題が隠されていることまた、疑いがないところである。ひとつには、ナボコフが、19世紀末以来、ヨーロッパ全域において顕著なものとなってきた、神秘的、超自然的なものにたいする関心を受け継ぎ、それをある種の哲学あるいは思想のようなものにまで高めようとしている点が注目される。一般に心霊現象と称されるものを時間の観念と結びつけて考える立場には、いくつかの先例や影響があると想定されるが、W・B・イェイツやヘンリー・ジェイムズなどとの差異も含めて、検討してみるべきことがらは多く残されている。

19世紀末の文化的遺産の継承という側面からいうならば、ナボコフと象徴主義との結びつきにも眼を向けてみる必要が生じてくるだろう。じゅうらい、とくに英語圏の学者の議論におけるナボコフの美学的な位置づけは、ともすれば、モダニズムとの関連に重きをおいたものとなりがちであった。しかし、いわゆるモダニズムの正典的な作品を取りあげつつ、それらをヨーロッパ象徴主義という脈絡において分析したエドモンド・ウィルソンの古典的著作、『アクセルの城—1870年から1930年にかけての想像力文学の研究』（1931年）にも実例が見られ

るとおり、モダニズムという用語そのものに格別配慮することなく、20世紀以後の文化現象を19世紀後半からの連続という相において論じることは、かなり有力な可能性として再検討してみるに価する。ロシア語文学者としても、英語文学者としても同様に重要なナボコフという稀有な存在をとおして、象徴主義についても、モダニズムについても、新たな展望が開けてくるであろうと予測することができる。作家論、作品論という水準において、テキストの独自性を徹底的に解明することと、人間の感性や心性といった、合理的に説明しがたいとはいえ、けっして無視するべきでない領域に接近することという、ふたつの面を両立させるところに、本研究の意義がある。

(3) 象徴主義にかんしても、また、モダニズムを含む一連のアヴァン・ギャルド運動にかんしても、欧米の研究者の多くは、論及する対象を、時代的、地域的に限定しすぎる嫌いがあった。その傾向は、英語作品とフランス語作品に主眼をおいた、エドモンド・ウィルソンの『アクセルの城』に端的に認めることができる。それにたいして、ロシア語圏において同時並行的に進行していた注目すべき動きもまた、西ヨーロッパのそれとはとくに関係づけられないまま論じられることが、しばしばであった。近年、アレクサンデル・ドリーニンなどの尽力によって、ナボコフがベールイやブロークからいかに多くの靈感を得ているかが明らかになりつつあるが、その場合には、ナボコフのロシア語時代を合衆国移住後と切り離し、より比重をおいて評価することになりがちである。

以上のような事情から判断して、ナボコフ研究を、真の意味における領域横断的な学問形態の契機となり得るものとしてとらえる点で、本研究は、じゅうぶんな独創性を有するものと称することができる。研究代表者（鈴木聡）は、すでにナボコフにかんする数篇の論攷を発表しているのみならず、21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」（京都大学大学院文学研究科）研究課題『翻訳』の諸相—異文化翻訳とその受容』第一研究班において、ナボコフ訳・註によるプーシキン作の韻文小説『エヴゲーニイ・オネーギン』を取りあげた研究会に平成14年度より参加してきた。これまでの成果を踏まえたうえで、今後研究課題としてゆきたいのは、人間の記憶と意

識の作用にかんする近・現代の科学的、哲学的言説の整理と、それらの言説に触発された想像力理論の具現化として見たナボコフの諸テキストの考察である。その場合においても、ナボコフがプーシキンの作品を読むうえで枢要さを訴えたような、汎ヨーロッパ的視点が求められることになるであろう。

3. 研究の方法

ナボコフの諸作品を詳細に読解することに基礎をおいたテキスト分析の作業を日常的に進行させるとともに、それらを20世紀の認識論的風土に根ざした兆候的テキストとしてとらえるという観点から、思想史、文化史、哲学、現象学、精神分析学等に関連した資料も蒐集し、理論的厳密性を期した。

本研究は、研究代表者（鈴木聡）が単独で遂行する計画であるため、研究代表者のもとになるべく多くの基礎資料を集める努力が不可欠となる。稀少価値のある文献を優先して、体系的にそろえるべきであることはいままでのないが、それだけにとどまることなく、よりいっそうの網羅性を追求することに意義があると考えられる。そのさい、ヴラジーミル・ナボコフ研究の動向を、漏れがないよう、最新の情報にいたるまで全般的に把握することは、当然念頭におかれるものの、「研究の目的」の項において略述したように、19世紀末から百年ほどのあいだにおける藝術および思想の動きにも最大限配慮しなければならない。とくに神秘主義、心霊術研究などのように、同時代のヨーロッパの知識人の多くを魅了した境界的な知の分野にかんして、広汎に例を求めて、比較研究の可能性をさぐり、個々の立場の相違点を見定めることが肝要である。また、鱗翅類研究者でもあるナボコフ独自の美学のありかたを正しく理解するためには、20世紀における進化論、進化学の軌跡をもたどってみる必要が生じてくるものと思われる。上記の点に鑑みて、研究経費中の設備備品費の多くのところは、図書ならびにその他の資料の購入に充てられる。資料の保管場所は、東京外国語大学個人研究室、外国語学部英語専攻共同研究室、および同附属図書館である。

そのいっぽうにおいて、研究目的達成のために有益と考えられる学会や研究会などにも可能なかぎり出席し、多方面で示されているすぐれ

た学問的知見に接する機会を得ることにしたい。とくにナボコフの作品を、20世紀における亡命者文学の系譜に連なるものとして論じるといふ議論の方向性も勘案してみる必要があるため、研究代表者の本来の専門分野に属さない多方面の研究成果をも極力把握するようにする。専門外の領域について、他分野の専門家から助言を得たり、入手困難な文献等の借覧、複写を求めたりせざるを得ない場合が生じることも考えられよう。そのような用途のために、研究経費中の国内旅費を充てることとする。

日常の研究活動においては、文献および資料の精密な分析を積みかさね、その結果にもとづく研究成果の公表（論文など）をめざすことに重点をおく。日本ナボコフ協会の活動をはじめとする、国内外におけるナボコフ研究の現状を踏まえ、とくにこれまで一般的に論及されることの少なかった問題に着目し、これに積極的に取り組む予定である。現時点まで、研究代表者は、主にナボコフの長篇小説を中心として考察してきたが、今後は、これまでの議論から洩れていた作品も取りあげ、さらには、比較的論じる機会の少なかった短篇小説や詩にも眼を向けることとする。上述の方針にもとづく徹底した分析作業を円滑化するため、パーソナル・コンピュータ用の最新ソフトウェアを積極的に導入する。購入にあたっては、研究経費中の消耗品費を充てる。その他の文房具類などについても同様である。複写した資料は、長期間の使用に耐えるように配慮し、安易に流出することのないように努める。電子化し得るファイル類は、複数のパーソナル・コンピュータに保存するだけでなく、持ち運び可能なディスクの形で保存し、データの管理をじゅうぶんにこなす。

上記のような研究方法は、各年度において用いられた。

4. 研究成果

(1) 平成18年度には「光と陰翳——ヴラジーミル・ナボコフの『暗闇のなかの笑い』」（『東京外国語大学論集』第72号）と「鏡と影——ヴラジーミル・ナボコフの『青白い炎』」（『東京外国語大学論集』第73号）という二篇の論攷を発表し、さらに、「スクリーンが映したテキスト——ヴラジーミル・ナボコフの『ロリータ——脚本』」をめぐって」と題する研究発表を行なった（日本英文学会関東支部第1回例会、平成18年10月28日）。

1950年代以降、代表作である『ロリータ』の登場によって一躍ベストセラー作家となり、映画界との接点が生じるのはるか以前から、ナボコフの作品においては、映画にたいする具体的な言及や、映画に由来する比喩的表現ならびにイメージ表現が頻繁に生起している。その点からも読み取ることができるように、映像文化にたいするナボコフの関心が終生にわたるものであったと称することができるが、とりわけ1920年代から1930年代にかけての時期（ナボコフの創作活動の重点が短篇小説から長篇小説に移行しつつあったころ）においては、同時代におけるいわゆるドイツ表現主義の動向や、ハリウッドで誕生したアニメーションにたいし多大の興味をいだいていた点が注目される。初期におけるロシア語作品がロシア的特性よりは国際性、多国籍性を志向していると思われることも重要である。

ナボコフの虚構作品は、それ自体が文学的テキストとしての独自性を堅持するものであるとともに、20世紀思想の潮流を遺憾なく例証するものでもある。そこにあっては、未来という究極の不確定性にいかに対処すべきかという課題が、最重要性を有していると考えることができる。時間的・空間的広がりをも備えたものとして把握された人間の意識の美学的形象化というナボコフのテキストの特性は、文学者としての彼の形成期であった1920年代における視覚藝術の傾向、とくに、ひとり彼のみならず同時代の感性に計り知れぬほどの刺戟と昂奮を与えつつあった映画から多くの着想を得ていると考えることができる。テキストの全般的様相を特徴づけているコントラストの階調や、極端に短い章の結びつきによって生じる場面と視点の転換などに、その種の影響を見て取ることが可能であろう。

文学的テキストと映像との関係は、後年、ナボコフ自身が脚本家として関与した映画『ロリータ』（スタンリー・キューブリック監督作品）において、よりいっそう錯綜した問題となって浮上してくることとなった。

(2) 平成19年度には「夢と記憶——ヴラジーミル・ナボコフの『マーシェンカ』」（『東京外国語大学論集』第74号）と「他者と異界——ヴラジーミル・ナボコフの『透明な対象』」（『東京外国語大学論集』第75号）という二篇の論

攷を発表し、さらに、「Vladimir Nabokov, *Notes on Prosody and Abram Gannibal: From the Commentary to the Author's Translation of Pushkin's Eugene Onegin* (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1964) をめぐって」と題する研究発表を行なった（日本ナボコフ協会研究会、平成19年10月28日）。

上記で示された研究の結果、微細な陰翳をかたちづくる表現上の種々の工夫によりテキストを織りなしてゆくナボコフ独自の手法を確認することができた。また、最初期と最後期の作品の比較により、彼の美学的立脚点が終生にわたり一貫性を有するものであることも論証し得た。人間の意識ならびに記憶という根源的な問題設定とともに、肉体の死後における意識の残存という難題にたいする関心を読み取ることができる点から見ても、彼の諸テキストは、20世紀の藝術および思想の全体的潮流と密接な連関を有するものとしてとらえることができる。

20世紀文化の特質を、20年代を中心としたモダニズムの相のもとにとらえるか、19世紀末に隆盛を見た審美主義、象徴主義との連続としてとらえるかという問題も引き続き論じてゆくべきであるが、『エヴゲーニイ・オネーギン』をめぐるナボコフの韻律論的考察が示唆しているように、革新や新機軸が、つねに伝統を参照枠とし、既存の発想や概念を組み換え、換骨奪胎したところになりたつものであるとする見かたが肝要であろうと思われる。

(3) 平成20年度には、20世紀文学研究・文化研究の要諦となるべき重要な時期として位置づけられる1920年だから1930年代にかけての美学的、藝術的意識の形成を解明する目的で、この年代におけるヴラジーミル・ナボコフの主要長編小説の分析に努めた。研究の成果を示す二篇の論攷、「反覆と音楽——ヴラジーミル・ナボコフの『ルージンの防禦』」（『東京外国語大学論集』第76号）と「亡命と帰還——ヴラジーミル・ナボコフの『偉業』」（『東京外国語大学論集』第77号）において取りあげられたナボコフの作品、『ルージンの防禦』と『偉業』にあっては、ナボコフ自身の自叙伝（『記憶よ語れ——自叙伝再訪』）との関連においてとらえられてよい亡命者固有の郷愁と苦悩のみならず、1920年代におけるケンブリッジ大学の学園生活が活写されている（『偉業』）という興味深い側面をも見いだすことができる。

この年代における諸作品に窺うことができるものが20世紀的な経験や感性の原型にあたっている

る点は疑いを容れないにせよ、同時に、前世紀（すなわち19世紀）に形成された知的風土が人びとの思考に一定の束縛を与えているという注目すべき事態が生じている点も看過できないと思われる。その一例となるのは、この場合、心霊研究に代表されるような、異界ならびに人間の肉体的な死のあとにおける精神あるいは意識の生存への関心である。

そのような志向は、いっぽうにおいては、いうまでもなく不可知論へといたる途を開くものであると思われるが、それとともに、科学的、合理的な観念や方法の体系によってはついに蝕知可能となし得ない境域においてこそ、人間の想像力の役割は他のなにもものにも代えがたい重要性を帯びるのではないかという展望にも通じているものと見なすことができるであろう。すなわち、主にドイツ観念論ならびに同時期におけるロマン主義美学に起点をおく旧来の想像力理論にたいして、20世紀的な（換言するならばより今日的な）認識の全体的枠組みに則した新たな想像力の意義の顕揚が1920年代、1930年代において兆しはじめていたことが、結論として主張されることとなるのである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6件）

①鈴木聡、「光と陰翳——ヴラジーミル・ナボコフの『暗闇のなかの笑い』」、『東京外国語大学論集』、査読無、第72号、2006年、1 - 26ページ。

<http://hdl.handle.net/10108/20280>

②鈴木聡、「鏡と影——ヴラジーミル・ナボコフの『青白い炎』」、『東京外国語大学論集』、査読無、第73号、2007年、51 - 77ページ。

<http://hdl.handle.net/10108/24093>

③鈴木聡、「夢と記憶——ヴラジーミル・ナボコフの『マーシェンカ』」、『東京外国語大学論集』、査読無、第74号、2007年、59 - 79ページ。

<http://hdl.handle.net/10108/27051>

④鈴木聡、「他者と異界——ヴラジーミル・ナボコフの『透明な対象』」、『東京外国語大学論集』、査読無、第75号、2007年、59 - 79ページ。

<http://hdl.handle.net/10108/37548>

⑤鈴木聡、「反覆と音楽——ヴラジーミル・ナボコフの『ルージンの防禦』」、『東京外国語大学論集』、査読無、第76号、2008年、63 -

83ページ。

<http://hdl.handle.net/10108/45208>

⑥鈴木聡、「亡命と帰還——ヴラジーミル・ナボコフの『偉業』」、『東京外国語大学論集』、査読無、第77号、2008年、71 - 93ページ。

<http://hdl.handle.net/10108/50378>

〔学会発表〕（計 2件）

①鈴木聡、「スクリーンが映したテキスト——ヴラジーミル・ナボコフの『ロリータ——脚本』をめぐって」、日本英文学会関東支部第1回例会、2006年10月28日、専修大学。

②鈴木聡、「「Vladimir Nabokov, *Notes on Prosody and Abram Gannibal: From the Commentary to the Author's Translation of Pushkin's Eugene Onegin* (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1964) をめぐって」、日本ナボコフ協会研究会、2007年10月28日、京大会館。

〔図書〕（計 0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0件）

○取得状況（計 0件）

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 聡 (SUZUKI Akira)

東京外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：80154516

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者